

【書評】

飯野正子・竹中豊編著

『カナダを旅する 37 章』「エリア・スタディーズ」

第 109 巻、明石書店、2012 年

IINO Masako et TAKENAKA Yutaka (dir.)

37 chapitres pour voyager au Canada, coll. « Area Studies », N° 109, Akashi-shoten, 2012.

廣松 勲

HIROMATSU Isao

今回書評を執筆するに当たり、本書を手にしたところ、ふと、ここ 10 年ほどの間に同じ手触りを幾度も感じていたことを思い起こす。それもそのはずである。明石書店のコレクション「エリア・スタディーズ」からは、本書を入れて既に 4 冊ものカナダ関連の書籍が出版されているのである。同コレクションにおいては、イギリス（ロンドンを含む）関連の書籍の 3 冊を超えて、最も多い数である（2013 年 3 月現在）。それでは、同コレクションにおけるカナダに関わる他の書籍と比べ、本書はいかなる特色をもつのであろうか。そして、本書の誘う「旅」とは、一体いかなるものなのであろうか。ここでは、主に 3 つの特色に触れた上で、本書が描き出す旅の行程を辿ってみることにしよう。

まず第 1 の特色は、本書の分類に関わるものである。同コレクションには、大きく分けて『～を知るための～章』と『～を旅する～章』という 2 つの系列が存在する。ごく簡単にその違いを述べるなら、前者では 1 国・1 地域における様々な歴史・政治・社会・文化現象が分析的に解説紹介されるのに対して、後者ではそれらの要素が「旅」という導きの糸によって統合されている。前者に比べて後者では、読書という体験が（想像力による）旅行という体験へと繋がるように工夫されているのである。さて、カナダに関する書籍としては、前者の系列でケベックを含めて既に 3 冊が存在するが、本書は初めて後者の系列に属する書籍として刊行された。それぞれの章では、多種多様な風景描写や旅の道程が記されており、読者は単に必要な情報に接するだけでなく、文字通りその世界（観）を幾筋もの経路を辿りつつ旅することに

なる。

ところで、現実にはせよ、物語にせよ、「旅」とは想像以上に拡がりをもった言葉である。まず当然ながら、「空間」の移動による旅がその最たるものであろう。しかし、それは同時に、「(歴史書やタイムスリップを介した) 時間」の移動、さらには「視点」の移動によっても行うことができる。本書は、このような幾つもの「旅」の様相を取り入れつつ、読者がカナダという広大な領野を旅することを可能にする。この点が本書の第2の特色である。このような特色は、本書でも取り上げられる作家ダニー・ラフェリエールがかつて述べた言葉を想起させる。2011年初来日の際に東北大学にて行われた講演会「ハイチとケベックのあいだで書く」において、彼は読書と旅との関わりに言及しつつ、「旅としての書籍 *livre-voyage*」という言葉を使用した。彼にとって、書物(そしてその読書行為)とは「時空間」という牢獄のみならず、(自らのステレオタイプ化された)視点という牢獄から旅立つための媒体でもあった。本書は、正しくこのような読書経験を望む読者には、最も適した書籍だといえる。

第3の特色としては、旅の必需品としての地図の存在が挙げられる。前3作とは異なり、本書においては地図の役割がとても大きいように思われる。まず本書では、これまでのようなカナダ全土地図のみならず、さらにはカナダ地形図までが収録されている。読者は、各章の記述とこれらの地図を見比べながら、旅路を辿っていくことになる。特にカナダを西から東へと辿る第2部では、各章冒頭にも簡易な地図が掲載されており、もしも馴染みのない地名が登場したとしても、その場所が一目で確認できるようになっている。このような地図の存在によって、読者はカナダ全体の歴史・政治・社会・文化現象の分析的解説を地理的にも把握しながら、各地域の風土を理解することが可能になるのである。

それでは、読者は本書を通じて、具体的にはどのような旅路を辿ることになるのだろうか。タイトルの通り、本書は各分野の専門家25人が執筆した37章で構成され、さらにそれらの章は大きく7部にまとめられている。ここでは本書の旅の誘いに身を任せながら、簡単に各部ごとの内容を辿っていくことにしよう。

序の部「旅立ちにあたって」では、本書の旅先案内人である編著者によってカナディアン・アイデンティティの構築と深化が駆け足で解説され、その見取り図が描き出される。その軽妙洒脱な文章のリズムに乗って「序の部」

を読み終わると、読者はこれからの旅路の一先ずの身支度を整えたことになる。

第1部『『カナダの歴史舞台』を旅する』では、カナダの歴史という旅路を辿ることになる。まずはアート・マップの歴史を介してヨーロッパ人の心象風景としての「カナダ」が、続いてオルレアン島、カナダの内陸部および平原地域、そしてアッパー・カナダやイギリス領北米という舞台において繰り広げられた歴史物語が綴られる。

第2部『『大陸国家カナダ』を旅する』では、西から東へ、つまりヴァンクーヴァー、エドモントン、ウィニペグ、トロント、モントリオール、ケベック市、セント・ジョンズという街を経由しながらカナダ全土を横断することになる。とりわけ、第2部には、街や自然の描写が多く挿入されており、読者は各地域・各街の風景を頭に思い描くことも難しくない。

第3部『『カナダの多文化社会』を旅する』では、読者は6つのモチーフで構成される多文化社会というテーマに乗り込み、旅路を進むことになる。先住民の生活舞台、フランス語世界、「妥当なる調整」に基づく多文化共生社会、イギリス系カナダ文化、カトリック教会、そして、多文化主義の法的位置を辿っていくという、この長い旅路によって、読者は現代カナダ社会の主要な構成要素を一望の下に見渡すことになるだろう。

第4部『『カナダの政治舞台』を旅する』では、連邦議会を中心とした政治文化、バイリンガリズム、総督の役割、カナダ・デーという主な政治の舞台装置が開示される。このような舞台を見据えつつ、カナダ政治をその特異性と普遍性から眺望することによって、読者はより深く歴史・社会・文化現象を理解することが可能になる。

第5部『『カナダ文学の舞台』を旅する』では、カナダ文学の代表的作家たちが描いてきた風景を旅することになる。それぞれ全く異なる社会文化的な文脈から出発したマーガレット・アトウッド、ダニー・ラフェリエール、アンヌ・エベール、そしてより大きな視点から日系文学や各地の児童文学においては、いかなる相貌の下にカナダという土地が表れるのか。つまり、これまでの章が「現実の国 *pays réel*」としてのカナダに注目していたとするなら、第5部で描かれるのは「夢見られた国 *pays rêvé*」としてのカナダなのである。

第6部『『日系人の過去と現在』を旅する』では、入植から現在に至るまでの日系社会の歴史が主要な地域ごとに紐解かれる。読者は再びカナダを横

断しながら、ヴァンクーヴァー、アルバータ、そしてトロントおよびモン
リオールの日系社会が、どのような社会・歴史的な経緯によってその土地に
定着することになったのかを知ることができる。さらに、このような過去か
ら現在への旅だけではなく、現在から未来の世代に向けて各地で日系コミュ
ニティ史の編纂作業も進められているという点は特に印象深い（2012 年末
には、第 32 章でも言及される『お蔭様で I am what I am because of you』（カ
ルガリー日系人協会編著）と題する歴史書（DVD 付き）が刊行された）。

第 7 部「『カナディアン・アーツ』を旅する」において、本書によって導
かれてきた旅は、その終着地に到達する。先住民アート、カナダ絵画、サウ
ンドスケープ、ファンタジーにおける先住民像、これら 4 つのテーマを扱う
4 章によって開示されるのは、伝統文化・口承文学の発展的活用であり、カ
ナダ芸術の独自性の弛まなき探究であり、そしてまた人間と環境との調和的
関係を探ってきた或る芸術家の人生である。このような想像（と創造）の世
界における旅を終えた読者は、本書の出発点から遙か遠くまで来たことに気
付くことであろう。

このように全行程を辿ってみると、本書は視点も筆致も対象も異なった
37 の掌編でできたモザイク画のように、その輻輳の中に見事な一貫性と整
合性を保ちつつ、読者を「書籍という旅」へと誘う魅力を備えている。確か
に、1 つ贅沢な要望を述べるとするならば、3 つ目の特色として挙げた地図
の活用に関しては、もう少し各章が地図との連携を深められていたならば、
読む行為にさらに旅らしさが生まれていたかも知れない。とはいえ、25 人
の執筆者が紡ぎ出すこの「旅の書籍」は、各章の社会文化的現象の簡略かつ
精緻な描写によって、カナダ研究・ケベック研究へのレファレンスに留まら
ず、カナダ旅行がもたらすはずの旅情を十二分に味わうことさえできる作品
である。

（ひろまつ いさお 日本学術振興会特別研究員 PD /
慶應義塾大学総合政策学部訪問研究員）

参考文献

- 綾部恒雄・飯野正子編（2003）『カナダを知るための 60 章』明石書店。
小畑精和・竹中豊編（2009）『ケベックを知るための 54 章』明石書店。
飯野正子・竹中豊編（2010）『現代カナダを知るための 57 章』明石書店。

日本カナダ学会編（2008）『新版 資料が語るカナダ』有斐閣。

廣松勲（2011）「ハイチとケベックのあいだで書く」『フランス文学研究』第 32 号、東北大学フランス語フランス文学会、仙台、48-50 頁。